

実態調査結果の分析・考察

千代田区が目指す「情報を読み解き 自己の信念に従って 行動ができる人」の育成 に向けた、児童・生徒の現在のリテラシー能力について、調査結果から以下の点が読み取れます。

1. 比較的高い能力が示された項目：

- オンラインコミュニケーションにおける配慮（「ネット上で発信するときに、相手を傷つけないための注意点を考えることができる」など）

○小学校5・6年生、中学校・中等教育学校のいずれの学年においても、「当てはまる」と「どちらかといえば当てはまる」を合わせると非常に高い割合を示しています。これは、オンライン上の適切な発信や他者への配慮に関する情報モラル教育が一定の効果を上げていることを示唆しています。

- 自己の行動が周囲・社会に与える影響の認識（「自分の行動が周囲にどのような影響を与えるか考え、迷惑をかけないよう判断することができる」など）

○小学校5・6年生で95～97%、中学校・中等教育学校で92～93%が「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答しており、自らの行動に対する責任感や配慮の意識は概ね高いと言えます。これは「善悪を判断して行動する力」の基礎が備わっていることを示しています。

- 発信者の立場による伝え方の違いの認識（「同じ出来事でも発信者の立場によって伝え方が違うことを考えることができる」など）

○小学校5・6年生で90～91%、中学校・中等教育学校で90～95%が「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答しており、発信者の意図を考える上で重要な視点である「発信者の立場」への意識は比較的高い水準にあります。

2. 育成に課題が見られる項目（特に注力すべき点）：

多くの項目で、特に中学校・中等教育学校の生徒において「当てはまる」と回答する割合が小学校よりも低い、または学年が上がるにつれて低下する傾向が見られ、より高度なリテラシー能力の育成に課題があることが示唆されます。

- 確かな情報を見極める力（「複数の方法を組み合わせて、どちらがより信頼できる情報かを考えることができる」など）

○複数の情報源を比較し信頼性を分析する能力については、小学校6年生で63%が「当てはまる」と回答している一方で、中学校3年生では46%にまで低下しています。また、「インターネットの情報を正しいかどうか確認できる」という問い合わせでも、中学校の生徒では「当てはまる」が50%を下回っており、情報源の分析や信頼性判断は特に課題です。

- 事実と意見を区別する力（「ニュースや記事を読んだとき、事実と意見を正しく分けながら、自分の考えを書くことができる」など）

○文章中で事実と意見を区別して書く能力、またニュースや記事から事実と意見を見つける能力とともに、小学校で50%台、中学校では40%台と低い傾向にあります。これは、情報リテラシーの根幹をなすスキルであり、強化が急務です。

- 批判的に読み解く力（「ニュースや記事などの情報を簡単に信じず、疑いながら読むことができる」「他者の主張や考えなどに触れたときに、矛盾点があれば指摘することができる」など）

○情報の批判的吟味や矛盾点の指摘といったより高度な批判的思考能力は、全学年を通して「当てはまる」が50%を下回り、特に中学校では30%台と非常に低い割合となっています。生徒が情報を鵜呑みにせず、主体的に評価する力が不足している可能性があります。

- 自分の考えを形成する力（「自分の意見を他の人に説明するときに、そう考えた理由もしっかりと伝えることができる」など）

○自分の意見を論理的に整理し、根拠を示して他者に伝える能力については、小学校で50%台であるのに対し、中学校では「当てはまる」が40%を下回っており、表現力と論理的思考力の不足が課題です。また、新たな情報に基づいて柔軟に考え方を見直す力も中学校では40%台と低い傾向にあります。

今後の取組に関する提案

上記の分析を踏まえ、「ちよだリテラシー教育」の目指す姿に近づくために、特に課題が見られた項目を中心に、以下の取り組みを提案します。

1. 国語科を中心とした取り組みの強化

- 「事実と意見の区別」を徹底する授業実践：新聞記事やインターネット上の記事、評論などを教材に、客観的事実と筆者の意見・解釈を明確に区別する演習を繰り返し行います [強化したい Q5, Q6]。児童・生徒が「なぜそれが事実と言えるのか」「なぜそれが意見なのか」を根拠とともに説明する機会を増やします。
- 「論理的な思考と表現」の訓練：ディベートやグループディスカッションを導入し、自分の意見を論理的に構築し、根拠を明示して他者に伝える練習を行います [強化したい Q13]。他者の意見の論点や矛盾点を整理し、指摘する演習も取り入れます [強化したい Q8]。
- 多様な発信者の意図を考察する活動：同じテーマを扱った複数の記事や映像（ニュース番組、ドキュメンタリーなど）を比較し、発信者（著者、製作者）の立場や意図によって伝え方が異なることを分析する学習を深めます [強化したい Q9, Q10]。

2. 読書活動の充実と情報リテラシー教育の連携

- 「批判的な読解力」を育む読書プログラム：単なる多読ではなく、異なる視点やテーマをもつ書籍・情報を比較して読み解く読書会やブックレビュー活動を推奨します [強化したい Q4]。読んだ内容を鵜呑みにせず、**「なぜこの本はこのような主張をしているのか？」「他の情報源ではどうなっているか？」**といった問い合わせを立てる習慣をつけさせます [強化したい Q7]。
- 読書後のアウトプットの多様化：感想文だけでなく、特定の情報や主張に対する賛否を論理的に記述したり、異なる情報源を比較して分析したりするレポートの作成を促します [強化したい Q3, Q4, Q5, Q6]。

3. 資料やデータの見方・活用の実践的な学習

- 「確かな情報を見極めるスキル」の徹底指導：インターネット上の情報（ニュースサイト、SNS、ブログなど）について、発信元の信頼性、情報の鮮度、他の情報源との比較、裏付けの確認など、具体的な情報検証プロセスを教え、実践させます [強化したい Q11, Q12]。フェイクニュースや誤情報の事例を取り上げ、見分け方を学ぶワークショップを実施します。

○情報収集・分析のプロジェクト学習：生徒自身が興味のあるテーマについて、複数の情報源から情報を収集・分析し、その信頼性を評価しながら、自分の考えをまとめる探究活動を推進します [強化したい Q3, Q11, Q12, Q13, Q14]。

4. 情報モラル教育の「情報リテラシー」への深化

○「相手を傷つけない」という発信側のモラルに加え、「受け取った情報をどう判断し、どう行動するか」という受信側のリテラシーを重視します [強化したい Q2, Q7, Q11, Q12]。情報の正確性を疑い、多角的に検証する姿勢を養うための具体的な授業内容を組み込みます。

5. AI など新たな技術の体験・活用を通じたリテラシー育成

○AI 生成情報の特性理解と批判的評価：AI が生成する情報（文章、画像など）の利便性と同時に、その根拠の不明確さや偏り、誤情報の可能性について深く理解させます [強化したい Q7, Q8, Q11]。AI が生成したテキストを検証し、事実と意見、論理の飛躍などを指摘する演習を取り入れます。

○AI を情報収集ツールとして活用する際の倫理・限界：AI を情報収集や整理のツールとして活用する方法を教えるとともに、AI の出力は最終的な判断の根拠ではないこと、必ず人間が検証する必要があることを強調します。

これらの取り組みを学年進行とともに段階的に難易度を上げながら系統的に実施し、教科横断的な連携を図ることで、生徒たちが変化の激しい情報社会を生き抜くために必要なリテラシー能力を包括的に育成していくことが期待されます。